

自己評価報告書(最終報告)

コース等名	現代教育課題総合コース	記載責任者	太田 直也
-------	-------------	-------	-------

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 大学院の学生定員の充足

貴専攻・コースにおける過去5年間の大学院学生定員充足状況を分析・検証し、達成目標を設定するとともに、どのような具体的方策を立てて、目標達成に向けて取り組んでいくかを示して欲しい。

1. 目標・計画

現代教育課題総合コースでは、担当教員の努力の結果、創設以来つねに収容定員を越える院生を迎えている。その背景として考えられるのは、ホームページの充実ならびに大学院ガイドブックにおけるコース紹介の内容改善があげられる。従来の大学院PRはともすれば専門用語を多用した「上から目線」のきらいをなすとせず、本当に要求されている情報とは何かについて、受験生予備軍の琴線に触れるような記載が必ずしも十分に提供されてこなかったという分析をもとに、文章、写真、キャッチなどの改善につねに努力し、よりよい広報の在り方をめざしてきた。このことが収容定員の1.4倍という現員を確保している大きな要因だと思われる。今後ともこのスタンスを維持し、さらなる改善に努めたい。

2. 点検・評価

現代教育課題総合コースでは今年度も定員を充足することができた。ガイドブックに関しては小西教授を中心として、またホームページに関しては藤村准教授を中心として常時新しい情報を盛り込むよう努めた。また各教員が学会等で本学及び本コースについての広報活動を行った。小西教授は学長裁量経費による広報活動にも携わった。以上のような努力が定員確保につながったものと確信する。

I-2. 学生支援の取り組み

学生の卒業時・修了時における「質」保証のためには、常日頃から学生に対する支援を推進していくことが必要である。

貴専攻・コースにおけるこれまでの学生支援の取り組み状況を分析・把握し、本年度どのような学生支援の取り組みを行うか、具体的な方策を示して欲しい。

1. 目標・計画

従来通り、長期履修1年生も含めて「総合の一員である」という家族的な紐帯の醸成につとめるべく、スポーツ、懇親、研究会などの行事への積極的な参加を呼びかけ、「総合」としての「いきがい」づくりに努力していく。具体的には、院生が一同に会することができる院生研究室の設置を引き続き担当部局に要請すること、修士論文発表会の形式を、いわゆる学会型から全員参加型のものにあらためること、教員採用試験に向けての勉強会開催の推奨を行うことを考えている。

2. 点検・評価

・新入生歓迎会に始まり、バーベキュー大会、鍋パーティー、修了生送別会などを開催した。
・スポーツ関係の行事には積極的な参加を促し、結果としてほぼすべての院生がソフトバレーボール大会とソフトボール大会に参加し、好成績を収めた。
・上記の2点により院生間の意思疎通が容易になり、院生同士で自主的に調査旅行に出かけることがあった。
・修士論文構想発表会は谷村准教授を中心に新たな形式で臨みほぼ期待通りの成功を収めた。その成果については田村講師及び谷村准教授を中心に平成23年度日本教育大学協会研究集会において発表し、高い評価を得た。
・教員採用試験に向けての勉強会開催を推奨し、院生による自主ゼミが開催された。
・東日本大震災の被災地及びその周辺地域出身の院生に対してはより多くの帰郷の機会が持てるようコースとして種々の計画を立てた。また太田教授を中心として軽音部のチャリティー・コンサートにも参与した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教育については、ゼミ単位での履修科目の指導、履修単位の確認をさらに徹底して行う。コースで展開しうる唯一の授業科目である「教育実践フィールド研究」においては、昨年度に引き続き海外授業補習校の実態の体験的理解をめざして活動を深めていく。
生活支援については前項に同じ。

2. 点検・評価

・履修科目の指導、履修単位の確認に関しては各ゼミにて徹底して行った。
・「教育実践フィールド研究」に関しては、プロジェクト経費の採択が叶わず、海外授業補習校に赴くことができなかった。しかし、デイ・サービス・センターと連携し介護等実習での経験を生かしつつ、新たな体験を通じて新たな知識の集積を図ることができた。

II-2. 研究

1. 目標・計画

本学のプロジェクト経費の支援を受けて、海外授業補習校における授業支援に関する研究を展開する計画である。この事業は昨年度試行的に実施したところ、当該補習校から絶大なる謝意が寄せられ、実践的なレベルの向上のみならず本学のイメージアップに大いなる寄与があった。必要な経費が手当て次第、継続的な活動を進めたい。また太田直也教授を中心に、「ふれあいアクティビティ」の指導に一層尽力していく。

2. 点検・評価

・上述のごとく、プロジェクト経費を得ることができなかったため海外授業補習校に関する研究は大幅な遅れを余儀なくされた。しかし、この研究を継続するべく小西教授が現地へ赴いた。
・太田教授を中心として「ふれあいアクティビティ」の指導には可能な限り尽力した。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

本学の最大の課題である大学院定員充足については、Ⅰ－1に記載の通りである。またそれと動機を一にするインターネットを活用した新しい開講形態の試みについては、コースの授業内容や方法を精査し、協力が可能かどうかを模索していく。

2. 点検・評価

- ・定員確保に関しては上記の通り。
- ・インターネットを活用した新しい開講形態の試みについては、可能な範囲で協力するべく、協議を重ねた。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

小コースは教科・領域を担当していないため、附属学校の研究活動に直接的に関わる機会がほとんどないので、個人単位で附属学校の教育活動への支援を行う程度に留まらざるを得ない。社会連携については、現代の教育課題を総合的に扱うというコースの趣旨を活かして、「教育支援アドバイザー制度」による講師要請依頼に積極的に対応していきたい。国際交流についてはⅡ－2で示したように、授業補習校の実践支援を通じて、アメリカ合衆国の教育関係者との交流を深める計画である。

2. 点検・評価

- ・個人単位で附属学校の教育活動への支援を行った。例えば、田村講師は附属小学校において4年生～6年生の英語活動に参加したり、長野教諭と共に6年生の理科の月の満ち欠けに関する授業を行った。
- ・国際交流については既述の通り、経費の都合で大幅に縮小せざるを得なかったが、幾分か進展が見られた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)